bit literacy

土屋大洋の

モードとしてのガバナンス

第5回 インテリジェンス・コミュニティ活性化の時代
――国家の安全とプライバシーのあり方

text：土屋大洋 ／HP ／「モードとしてのガバナンス」の一覧へ ／Text Only Version

インテリジェンス・コミュニティの失敗

もうすぐあの日から一年が経とうとしている。昨年9月11日の対米同時多発テロである。私はアメリカ人ではないが、あの時アメリカで暮らしていた者としては感慨深い。当時の私の自宅はワシントンDCエリアで、ペンタゴンの近くだった（ペンタゴンは正確にはワシントンDCではなく、ポトマック川を渡ったヴァージニア州側にある）。幸いと言うべきか、その日はサンフランシスコにいたので直接の被害はなかった。しかし、飛行機が飛ばなかったため、しばらく自宅に帰ることができなかった。ワシントンに帰ってからも、しょっちゅうテロの警告が出され、炭疽菌騒ぎが続いた。全米の中でもニューヨークやワシントンDCは特殊な街で、アメリカの田舎町に行けば状況はぜんぜん違っていたのだが、大都市ではそれなりの緊張がしばらくは続いた。

そうした緊張感のなかで、ワシントンDCのテレビや新聞はインテリジェンス・コミュニティの失敗について連日のように書き立てた。なぜテロを事前に察知できなかったのかというのである。今になってみれば、関連する情報はFBI（連邦捜査局）やCIA（中央情報局）にたくさんあったのだが、それを的確な時間内でまとめ上げることができなかったのが、彼らの失敗である。

ともかく、FBIやCIAといった映画のなかのなぞめいた組織が現実の存在として意識されるようになった。しかし、インテリジェンス・コミュニティといわれるこうした諜

報・法執行機関についてわれわれは断片的知識しか持ち合わせていない。無論、ウェブでインテリジェンス・コミュニティのことを検索すれば山のように情報が出てくる。しかし、まだまだ日常生活に馴染みのあるものではない。

1/3

ご意見・お問い合わせ ¦ インフォメーション ¦ トップページ ¦ ビットリテラシー・トップページ
Produced by NTT Resonant Inc. under license from Wired Digital Inc.

bit literacy

土屋大洋の

モードとしてのガバナンス

国家安全保障法によって定められている13の機関

米国のインテリジェンス・コミュニティの本拠は、やはり首都ワシントンDCに集まっている。三大インテリジェンス機関はワシントンDCエリアの二州(メリーランド州とヴァージニア州)と一特別市(ワシントンDC)に散らばっていて、地理的なバランスが取られているのかと感心してしまう。

ホワイト・ハウスにもっとも近いのがFBI本部だ。ホワイト・ハウスと議会を結ぶのがペンシルベニア・アベニューだが、その中間からややホワイト・ハウスよりに位置している。ドラマや映画でおなじみの奇妙な形をした建物で、最近は通り沿いに出る屋台風売店でビンラディンTシャツが売られている。

ホワイトハウスから西へ、ジョージタウンの繁華街を抜け、キー・ブリッジを渡ってヴァージニア州に入り、ジョージ・ワシントン・メモリアル・パークウェーを15分ほど走ると、CIAのあるラングレーに着く。といっても、一般の人はなかなか入れない。パークウェーを降りて脇道を進めば入り口に行き着くはずだが、用事がない人は入れず、林の奥に建物は隠れているため、外から様子をうかがうこともできない。ここにあるのかと思いながら通り過ぎるしかない。映画『トータル・フィアーズ』では、CIAの中の様子(といっても撮影用のセットだが)が分かって面白い。普段着姿の若者たちがロシア首脳の一挙手一投足に目を凝らしているのだ。

今度はワシントンDCから北東方向に伸びるニューヨーク・アベニューを走り続けると、やがてボルチモア・ワシントン・パークウェーにつながる。ワシントン市内から1時間弱走るとNSA(国家安全保障局)のあるメリーランド州フォート・ミードに着く。ここでもパークウェーから職員専用の脇道が用意されている。FBIやCIAのことは聞いたことがあっても、NSAには馴染みがないという声も聞こえてきそうだ。それもそのはずで、NSAは1952年の設立当初、存在すら秘密にされていた。フォート・ミードに作られて

いる建物が何なのかも公表されず、建設予算も各省庁の予算のなかに分散して紛れ込ませるという周到ぶりだった。NSAは他国の暗号解読・通信傍受とともに、米国の通信が他国に聞かれないようにするための各種活動を行っている。存在自体がなぞめいた組織なのだ。

私はたまたま、これからNSAに就職するという人を紹介してもらったことがある。NSAの職員であることは隠し通さなくてはならない秘密ではないそうだが、それでも自ら名乗ることはなく、名刺も持たないらしい。その人とはそれっきり会っていない。その人の方から「もう会うのは難しくなるし、どうしても必要な時だけ配偶者の電子メールに連絡を欲しい」と言われたからである。それでも最近では映画『メン・イン・ブラック』でパロディ化されているし、『エネミー・オブ・アメリカ』で、多少の誇張はあるものの、その活動内容が暴露されている。

しかし、アメリカのインテリジェンス・コミュニティはこの三つだけではない。1947年に作られ、その後改訂され続けてきている国家安全保障法によって定められている13の機関の集まりのことをインテリジェンス・コミュニティと総称している。つまり、CIA、NSA、国家画像地図局（NIMA）、国家偵察局（NRO）、国防情報局（DIA）、陸軍情報部、海軍情報部（ONI）、空軍情報部（AIA）、海兵隊情報部、情報調査局（INR）、不拡散・国家安全保障部、情報支援局、FBIの13機関である。

2/3

Produced by NTT Resonant Inc. under license from Wired Digital Inc.

bit literacy
土屋大洋の
モードとしてのガバナンス

国家戦略的な視点から情報をいかに管理するか

面白いのは、インフォメーションとインテリジェンスの世界に生きる彼らも、俗に言う情報化という点ではそれほどしっかりしていないことだ。最近までFBIのインターネット・アクセスはダイヤルアップだったという話もあるし、FBIが所有しているはずのラップトップがごっそりなくなったまま行方知らずというニュースもある。

しかし、NSAのようにモンスター・マシンを常時稼働させているところもある。フォート・ミードのNSAの脇に国家暗号学博物館がある。暗号がいかにアメリカ史において重要な役割を果たしてきたかを紹介するためのもので、裏アメリカ史が垣間見られる。日本軍の暗号書や紫暗号機といった、他では現存が確認されていないものも置かれている。車がないとアクセスできない場所にあるため(バスや電車では行けない)、観光ガイドには載らないが、訪れる価値のあるところだ。

ここには電子化される以前の暗号機もあるが、何といっても圧巻なのはNSAが過去に使っていたコンピュータの数々だ。壁一面の巨大なものや、日米スパコン摩擦まで引き起こしたクレイ社のスーパー・コンピュータもすでに過去の遺物となっている。
中でも一番新しいのが、1993年8月から2000年4月まで使われていたというクレイ社製の愛称 ZIEGLER(YMP M90)である。このマシンは巨大な集積回路を組み込んでいる。私のメモが間違いなければ、メモリのサイズはなんと32ギガ(3万2,000メガ)で、142ギガのディスク・スペースを持っており、8個の並列プロセッサを内蔵していた。このマシンがすでに過去のものなのである。いったい今のNSAはどんなマシンを使っているのだろうか。

最近NSAと対になって語られるエシュロンには、とんでもないモンスター・マシンが使われているかもしれない。エシュロンは衛星を使って世界中の通信を傍受しているといわれるシステムである。どんなコンピュータを持っていても万能ではないが、われわれの想像をしのぐ活動をして

いるのではないかと勘ぐりたくなるのも当然だ。

ひるがえって日本のインテリジェンス・コミュニティはどうであろうか。日本にも内閣情報調査室や法務省の公安調査庁、外務省の国際情報局など、いくつかの該当する組織がある。自分の国の悪口を言うのは好きではないが、どうやらあまりうまく連繋がとれていないらしい。国家機密保護法(いわゆるスパイ防止法)も個人情報保護法もない現在では、情報に関するルールが整備されていないと言っても過言ではない。ようやく成立・施行された情報公開法だけでは、体系的な情報の管理は難しい。

しかし、日本の情報化は昨年以降、めざましい勢いで進んでいる。モバイル・インターネット、ADSLやケーブル・モデムによるミドルバンド・アクセス、光ファイバーによるブロードバンド、そして無線LANなどの普及は世界的に見てもひけをとるものではない。そうだとすると、情報をいかに管理するかという問題は、住基ネット云々という問題に矮小化されるべきではない。もっと歴史的、国家戦略的な視点から考える必要がある。国家暗号学博物館を見ていると、日本の開戦の失敗、敗戦の失敗はインテリジェンス軽視にあったのではないかと思われてくる。

3/3 Archive

Produced by NTT Resonant Inc. under license from Wired Digital Inc.